

2015（平成27）年6月

NPO 法人 日本ビオトープ協会
第7回ビオトープ顕彰受賞作品の紹介

◇顕彰委員会委員長の講評：『ビオトープフォーラム in 富山 2015』

ービオトープによるコミュニティづくりー（2015年6月12日）にて

今回も、各地区から厳選されたビオトープ事業の推薦・応募がありました。優劣のつけがたい、いずれも状況・ニーズに応じた工夫がされた素晴らしいビオトープであり、改めて、ビオトープ事業の奥深さを教えられたと思っています。

今回表彰となったビオトープ施設について、簡単に紹介をします。

中部地区から推薦のあった豊田市北部工場用地開発事業「ハッチョウトンボのビオトープ」は、日本発条株式会社の所有地に昔の湿地環境を復元することにより、ハッチョウトンボなどのトンボが多数生息するビオトープを創生しています。COP10の開催された愛知におけるビオトープであることにも意味が深いです。現在は完成した姿ではなく、生物多様性を体験できる貴重な場として発展を期待しています。COP10以降、生物多様性に関心が深い愛知県下の日本発条株式会社さんが取り組んだ子のビオトープは、企業ビオトープのモデル事業としても評価できるものであります。CSR 特別賞を受賞。



北海道・東北地区から推薦のあった「日本最寒の地 幌加内ビオトープ」は、中心として活動をしている内海氏が、動物写真家としての優れた見識を活かし、昆虫・鳥類とその食草を配慮したビオトープ空間を作っています。全体としてまだまだ緑の多い北海道・東北地区において、地域の自然・動植物の生息・生態を観察できる自然資産、町の自然資源という価値・位置づけは、発展性のある意外と新しい視点ではないでしょうか。ぜひお話を聞いてみたい事例でもあります。審査委員長賞です。

中四国地区から推薦のあった、くまの・みらい保育園の「不思議の森のビオトープ」は、保育園の職員、保護者との協働作業として高く評価できます。「不思議の森」という名称に込められた関係者の思いが、ビオトープ施設に強く反映されていると言えます。子供たちの喜んでいる姿、橋げたの落書きボード等、魅力的なビオトープとして、学校ビオトープ大賞にふさわしいと思います。

北陸・信越地区から推薦のあった「射水市青井谷野手地区周辺里山ビオトープ」は、市の市民協働事業に採択され、地元の小杉高等学校OBが中心に活動をしている「NPO 法人自然環境ネットワーク・射水市ビオトープ協会」が里山保全の管理（除草・枯れ枝処理、竹林伐採等）を活発に行っているとお聞きしました。自然観察会・環境セミナー、地域コミュニティの形成もさかんです。緑におおわれているとはいえ外来種のセイタカアワダチソウの繁茂に違和感を覚え、コンセプトはゲンジボタル、ホクリクサンショウウオ、モリアオガエル等をふるさとの生き物を呼び戻すことを第一に計画されている。本日その活動を紹介いただけるということで、楽しみにしております。ビオトープ大賞です。

（前横浜国立大学学長、自然環境復元学会会長、協会代表顧問 鈴木邦雄顕彰選考委員長）





顕彰受賞者





顕彰事例発表

◇ピオトープ大賞



(各応募書類より転記)

名 称	射水市青井谷野手地区周辺里山ピオトープ
受賞者	(特非) 自然環境ネットワーク・射水市ピオトープ協会、株式会社久郷一樹園
【テーマ・概要】	
<p>過疎化の進む里山では、外来植物のセイタカアワダチ草が繁茂し、里山としての生物多様性が失われつつあった。里山ピオトープを形成することでホタルやモリアオガエル・サンショウオ等貴重種を始めとする多くの在来生物の保全を図ると共に、そのピオトープを核として生物・自然と触れ合う事業を行いコミュニティの推進を図り近隣の子供達の健全育成を図る環境教育の場とする。</p>	
【整備方針と管理手法】	
<p>今回の事業は射水市の平成25年度公募提案型市民協働事業に「生物多様性保全型里山ピオトープの形成に関する事業」として提案し、採択された。射水市青井谷の里山地域に元々あった沢づたいの小さな水たまりを多自然ピオトープ池として築造しその周辺も併せて整備した。その後毎年里山保全・整備事業として3回に渡り周辺の竹林を伐採し、山林の保全を図り、併せて周辺の除草管理や枯枝処理等の維持管理を通して地域在来生物(特にモリアオガエルの産卵地として活用)の保全を図っている。またこのピオトープ池で、自然観察会や環境セミナー等を開催し、子供達の健全育成や環境教育の推進を図ると共に生物や生態系の多様性の理念の普及を図っている。また、これらのピオトープに関する諸事業を地域コミュニティの形成にも大いに貢献している。</p>	
【様子】	
	
ピオトープ池	ピオトープ池周辺の見学会



◇学校ピオトープ大賞

名 称	不思議の森のピオトープ
受賞者	社会福祉法人 微妙福祉会、くまの・みらい保育園、株式会社カジオカL.A
【テーマ・概要】	
<p>自然の中でのおびのびとたくましく成長していく子どもたちをイメージしてつくりました。ピオトープの中のめだかやどじょうと共存し、やごがトンボになって飛びたっていく瞬間に遭遇する子どもたち。その周りには、さくらんぼやびわ、梅など実のなる木が枝を広げて生い茂り、季節の移ろいを感じさせてくれます。身近にある小さな自然の中で、子どもたちは、それぞれの年齢ごとにさまざまな体験を通して生きることの厳しさ、楽しさ、命の不思議さを感じて心豊かな人間となることを願っています。</p>	
【整備方針と管理手法】	
<p>開園して8年になりますが、開園当初は桜の木1本もない閑散とした保育園でした。春には桜、秋には柿の実やどんぐりなどにあふれた、夢のある保育園にしようと保護者の方々が手伝ってくださいました。ピオトープ作りも保護者の皆さんがお手伝いをくださっています。夏には、卒園児を招いてピオトープ観察会も行っています。いつまでも園児にとっても地域の皆さんにとっても楽しい場所となるように心がけています。</p>	
【様子】	
	
園庭	どんぐりの木他実のなる木を植樹

◇審査委員長賞

名 称	日本最寒の地 幌加内ビオトープ
受賞者	内海 千樫氏
<p>【テーマ・概要】 当地は国内でも最寒の地に位置し、平地でも高山帯に棲む動植物が見られるが、平地は田畑、傾斜地は深いやぶに覆われており、本来この地にあった生態系は観察しにくい。 この地に生息する昆虫や植物の観察できる空間を創ろうとするもの。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 この地に自生していた草木を植えることにより、本来この地に見られた昆虫たちを呼び戻そうとしている。 12,000㎡の敷地をフルに活用し自然の植生の中に、多様な生き物を増やすため、地元を中心に食草・食樹を見つけ出して植栽している。手入れをしない土地は1mくらいの笹に覆われ、天然での新たな植生は生まれなため、必要に応じて年間3回程度の笹刈りで他の天然更新を試みることも行っている。</p>	
<p>【様子】</p>	 <p>マガモ</p>  <p>羽化直後のキアゲハ</p>

◇CSR特別賞

名 称	ハッチョウトンボのビオトープ
受賞者	日本発条株式会社、太啓建設株式会社、株式会社鈴鍵
<p>【テーマ・概要】 『トンボのビオトープ』（帰ってきたハッチョウトンボ） このビオトープは、工業用地開発事業用地内に作られました。 当初は手の付けられていない草地で、平成17年に開催された愛・地球博（2005年日本国際博覧会）の臨時駐車場として整備されました。駐車場の整備を行う際に希少種でもある「ハッチョウトンボ」が発見され一部の生息域を保護し駐車場の整備が行われました。愛・地球博が閉幕後は、更地に戻されましたが管理されていない状態で、草丈が高くなりハッチョウトンボの生息は確認出来ない様な状態でした。その後、工業用地としての開発に際し、ハッチョウトンボの生態調査、実際に生息している場所に行きハッチョウトンボの観察を行い、現況の保護地を今以上にハッチョウトンボや沢山の生物が生息できる様に整備しました。</p>	
<p>【整備方針と管理手法】 ハッチョウトンボは水が滲出している湿地や湿原、休耕田などに生息しており、いずれも日当たりがよく、ミズゴケ類やサギソウ、モウセンゴケなどが生育し、浅い水域がひろがっているような環境を好みます。今回整備したビオトープは、山からの湧水を引込み、水深5cm～10cm程度の池、湿地を創りました。また、ハッチョウトンボは体が小さい為、長距離の移動ができません。ほとんどの種が、同じ場所で生息を続けています。より多くのハッチョウトンボが生息できるように、池(湿地)は広く作り草木で覆われのない様に草は背丈が高くない自生種を少量植栽し、あとは自然の力に任せました。 今では、ハッチョウトンボはもちろんのこと、キイトンボ、アジイトンボなどや水中昆虫、生物がたくさん生息するようになりました。</p>	
<p>【様子】</p>	 <p>工事完了から3年後</p>  <p>ハッチョウトンボ</p>